

## 《研究ノート》

## 迷走するアメリカ外交？： リベラルな覇権 vs. リアリズム

岡 垣 知 子

ステイーヴン・M・ウォルト『善意の地獄：アメリカの対外政策エリートと衰退するアメリカの優位性』 2018年。(Stephen M. Walt, *The Hell of Good Intentions: America's Foreign Policy Elite and the Decline of U.S. Primacy*, New York: Picador, 2018.)

ジョン・J・ミアシャイマー『大いなる妄想：リベラルの夢と国際政治の現実』 2018年。(John J. Mearsheimer, *The Great Delusion: Liberal Dreams and International Realities*, New Haven and London: Yale University Press, 2018.)

——民主主義は最悪の政治体制である。他のすべての政治体制を除いては。——

ウィンストン・チャーチル

——リアリズムは最悪の国際政治理論である。他のすべての理論を除いては。——

ステイーヴン・ウォルト

### はじめに

2017年1月以降、アメリカの有識者の間では、対外政策の色彩が大きく変わったという認識が共有されるようになった。「アメリカ・ファースト」を標語として掲げ、同盟国や国際組織との連携よりもアメリカの国益を最優先するトランプ大統領の誕生に伴ってである。第二次世界大戦後のアメリカは、戦前の特

定の歴史的時期にしばしば見られた孤立主義を一掃して、国際公共財を積極的に提供する国際社会のリーダーとして、リベラルな価値観を体现してきた。政権による程度の違いはあったものの、トランプ大統領の誕生まではほぼ一貫して、国際社会への積極的関与を重視する国際主義の立場をとってきたといえる。「自由は我々だけのものではなく、人類すべてのためのものである」というのが、理念の国アメリカに典型的な外交姿勢である。とりわけ冷戦終焉後まもなく、世界がアメリカを中心とする単極システムとして強く認識された時期 (the unipolar moment)<sup>1)</sup> には、アメリカが世界秩序と安定に深くかわり、リベラル・デモクラシーというアメリカ自身のイメージに世界を作りかえようとする印象を人々に強く与えた。しかし、冷戦終焉後のアメリカ主導の世界は、必ずしも世界の秩序と安定に貢献してきたわけではないという見解もある。とりわけ中東においては、アメリカによるリベラル・デモクラシーの輸出は、国家間協調と世界平和どころか、むしろ紛争と無秩序をもたらしたという認識も高まっている。

スティーヴン・ウォルトの『善意の地獄：アメリカの対外政策エリートと衰退するアメリカの優位性』とジョン・ミアシャイマーの『大いなる妄想：リベラルの夢と国際政治の現実』は、近年のアメリカの外交姿勢を、リアリズムに基づく国際政治学の立場から批判的に分析し、評価したものである。およそ国際政治学におけるリアリストが唱える理想的な外交政策のエッセンスは、自国の国益とかかわるところにのみ力を注ぐ点にある。ハンス・モーゲンソーやケネス・ウォルツといったリアリストの国際政治学者が、アメリカの国益が直接に関わらない国や地域に関与したり介入したりすべきでないという理由から、ベトナム戦争やイラク戦争にかつて反対したように、ウォルトやミアシャイマーも、アメリカによる民主主義理念の普及や他国の国家建設への関与、人道的介入、対テロ戦争、NATOの拡大等を強く批判し、アメリカ外交の理想的姿を、抑制 (restraint) とオフショア・バランシング<sup>2)</sup> に見ている。

---

1) Charles Krauthammer, "The Unipolar Moment," *Foreign Affairs*, Vol.70, No.1, (Winter 1990/1991), pp.23-33.

ウォルトとミアシャイマーは、リアリストの学者としてこれまでしばしば共同の研究プロジェクトに携わってきた<sup>3)</sup>。このたび、2018年という同じ年に、アメリカの国際政治学におけるリアリストの代表格である二人の学者が、「リベラルな覇権 (liberal hegemony)」<sup>4)</sup> というアメリカの伝統的な外交スタンスを批判的に分析する本を出版するに至ったのは全くの偶然であるが、時期を得たこの二冊の著作の出版は、まさに今、冷徹な世界情勢分析を踏まえてアメリカ外交のあり方を再考することが喫緊の課題となっていることを象徴するものといえよう。

### 1. ウォルト: 『善意の地獄: アメリカの対外政策エリートと衰退するアメリカの優位性』

スティーヴン・ウォルトは、カリフォルニア大学バークレー校でケネス・ウォルツに師事し、勢力均衡に代わる「脅威の均衡」という概念を打ち出した『同盟の起源』<sup>5)</sup> という本で最初に脚光を浴びた国際政治学者である。シカゴ大学

- 
- 2) クリストファー・レインによって用いられた言葉で、地域のアクターに地域的勢力均衡の維持を任せ、その均衡が崩れそうになった時にのみアメリカが介入する戦略である。同盟国や友好国の防衛と発展をアメリカは援助はするものの、そのすべてを担うのではないという、ニクソン政権下で打ち出された方針と似ている。
  - 3) 共同プロジェクトとして最初に注目を浴びたのが、アメリカの対イスラエル政策を批判した2006年3月の論文であり、これは後に本として出版された。John J. Mearsheimer and Stephen M. Walt, *The Israel Lobby and U.S. Foreign Policy*, (Farrar Straus & Giroux, 2007); 日本語訳は、『イスラエル・ロビーとアメリカの外交政策 (1・2)』(副島隆彦訳、講談社、2007年)。
  - 4) *Foreign Affairs*, Anthology, Vol.42, (January, 2017); D. Deudney and J. Ikenberry, "The Nature and Sources of Liberal International Order," *Review of International Studies* 25, No.2, (April, 1999). 「リベラルな覇権」とは、アメリカのパワーの優位を前提として、自由民主主義、経済的相互依存、国際制度に基き、世界を組織化しようとする外交姿勢と定義することができる。
  - 5) Stephen M. Walt, *The Origins of Alliances*, (Cornell University Press, 1987). その他の著作として、*Revolution and War*, (Cornell University Press, 1996), *Taming*

等を経て、現在ハーバード大学ケネディー行政大学院で教鞭を執っている。

著作の目的は、冷戦終焉以来のアメリカ外交政策批判であり、なぜアメリカ外交がイラクやアフガニスタンやリビアをめぐるケースのような失敗に悩まされ続けるのかを説明することである。1991年末のソ連崩壊によって、アメリカは世界の頂点に立ったが、その約30年後、状況は変わった。対露関係、対中関係ともに悪化し、ナショナリズムとポピュリズムが世界各地で横行しているのが今日である。アメリカの正統な外交政策が歪んでしまった原因は、リベラルな覇権への固執にあるとウォルトは述べ、これを「蔓延する病理」と呼ぶ。

トランプ大統領就任以降、アメリカでは国際社会におけるアメリカの役割が拡大しすぎているという認識が強くなった。同盟による他国・他地域へのアメリカの防衛義務は、アメリカ史上、今日最も多くなっている。また、アフガニスタンおよびイラクと闘っている戦争の他、秘密工作にもアメリカは山ほどかかわっている。どうしてこのような結果になったのか？とウォルトは問いかけ<sup>6)</sup>、第1章、第2章におけるクリントン、G・W・ブッシュ、オバマの外交の評価を通して、リベラルな覇権に基づく外交政策が、国際政治についての非現実的で不正確な理解に基いているため、失敗したと結論づける。なお、トランプ政権が誕生してからの対中政策、貿易問題、国際組織対応等にみられる外交のゼロサムのアプローチは、ウォルトの主張に与しているかのようにも一見見えるが、ウォルトはトランプ大統領を現代史におけるもっとも無能な大統領と呼び、このような大統領が生まれたのは、冷戦終焉以降の3人の大統領の外交政策が失敗したからであるとしている。

アメリカ外交の失敗原因についてのウォルトの具体的な答えは、外交政策コミュニティの在り方である。つまり国際問題の 이슈に日常的に深くかかわっている個人と組織であり、ウォルトはそれを「blob」と呼ぶ<sup>7)</sup>。国家のため

---

*American Power: The Global Response to U.S. Primacy*, (W.W. Norton, 2005) などの著作がある。

6) Stephen Walt, "American Has a Commitment Problem," *Voice*, (January 29, 2019).

7) "blob"はもともとオバマ政権の国家安全保障顧問代理ベン・ローズが用いた言葉で

に献身的に日々働き、政治的パワーを持っている人々のエネルギーがリベラルな覇権への信奉に向けられていることが問題であるとし、ウォルトは具体的な個人名を挙げて強く批判する。著作のタイトルである「善意の地獄」とは、まさに、善意で国のために働いている外交コミュニティの人々の「思想販売市場」が生み出すアメリカ外交政策の失敗なのである。第3章から第5章にかけてウォルトは、クリントン、ブッシュ、オバマ政権における外交政策の内部事情を詳細に研究した結果として、アメリカの外交コミュニティは、統制の取れた業績主義に基づいた組織ではなく、順応型で、系統が同じリベラリズムにコミットしている職業集団であり、過去25年間、政策の選好も信条も変わっていないと攻撃する。

では、外交コミュニティが、影響力だけは保持し続ける一方で、過去の失敗から反省することなく、無責任なまま、間違った考え方と政策を広めているメカニズムは何なのか？なぜ失敗し続けながらも政治指導者たちは過去から学ばないのか？ウォルトによれば、その一つの理由は、アメリカが地政学的に有利で安全な条件の下にあるため、間違った政策をとり続けても、国家の存続が危険にさらされることがないためである。もう一つの理由は、外交コミュニティが大衆の議論を支配してしまっており、アメリカ国民がリベラルな覇権を疑う余地がないためである。失敗し続ける外交政策に外交エリートが大衆の支持を取り続けるメカニズムは、第4章と第5章で説明されている。対外的脅威の誇張、国際的な指導力を行使する便益によって、アメリカの役割がグローバルに拡大するコストが隠蔽される中、政治家や公務員等、影響力ある外交エリートは、「思想販売市場」を操作して、アメリカの大衆にリベラリズムを売りこむのである。リベラルな覇権に同意しない者や批評家は周辺化し、罰せられるため、大きな国際的事件でも起こらない限り、リベラルな覇権はアメリカ外交のデフォルトの戦略になってしまう。これが、外交政策を牛耳っている人々が責任を逃れ、同じ担当者が指名され続け、同じ論理が挑戦を受けないまま、外交の歯車が回る仕組みである。こういったメカニズムが存在する以上、アメ

---

あり、大きなデータベースやだぶついたものを意味する。

リカ外交は変わるはずはない。共和党も民主党も「リベラル覇権主義」の戦略をとり続けることになるのである<sup>8)</sup>。

では、アメリカの対外政策はどうあるべきなのか？第6章と第7章でウォルトは、アメリカ外交政策をいかに「行わない」か、そして、現況をどう変えられるかを論じ、「オフショア・balancing」という地政学的概念に基いた大戦略を提示する。つまり、アメリカの軍事費は、全世界ではなく、ヨーロッパ、東アジア、ペルシャ湾の勢力均衡維持に集中して向けられるべきであり、民主主義拡大を目指したり、世界の周辺的な地域にまで口を出すのは慎むべきであるということである。その中でも重要なのは北東アジアであり、それ以外に対しては、アメリカは静かに見守るべきであるとウォルトは主張する。例えばイランに関しては、核濃縮能力を持っていることを認識しつつも、地域的な覇権国になる野心は持っていないと見て、オフショア・balancingと並行した形の伝統的外交の復活や平和構築を提唱するのである。

ウォルトの警告は、①強国であるが故の傲慢さ、②国内社会における派閥間の取り決めとして外交政策が決まってしまう非合理性、③外国の国益に翻弄されること、④国際社会の評判に対する過度な気遣い、⑤埋没費用(sunk cost)の誤謬<sup>9)</sup>、⑥アメリカに典型的な理念外交の傾向<sup>10)</sup>に向けられている。国際的事件や事象に対して静観し、見守るよりも、何か行動を起こすことは、ずっとコストがかかるというのがウォルトの考え方の根底にある。

---

8) こういった理念外交の傾向、つまりリベラルな覇権やネオコン思想に反映されているアメリカ外交の傾向は、例えば、イラク戦争の際に民主党のジョン・ケリーやヒラリー・クリントンも賛成したように、超党派的にみられる。

9) 投資したものに対して過度に期待すること。

10) 「明白なる使命」といった考え方や、いわゆる宣教師外交に見られ、アイケンベリーやダドニーらが唱えるリベラリズムやネオコン思想に通じている。

## 2. ジョン・J・ミアシャイマー：『大いなる妄想：リベラルの夢と国際政治の現実』

ミアシャイマーは、ウェストポイントを卒業して空軍に配属されたのち、コーネル大学より1981年博士号を取得した国際政治学者で、ケネス・ウォルツ以来、最も重要なリアリストの一人とされている。悲観的な国際政治観を提唱することから、「暗黒のプリンス (Prince of Darkness)」という異名もとるシカゴ大学教授であり、リデル・ハートの批評や『大国の悲劇』<sup>11)</sup>、イスラエルロビーについてのウォルトとの共著、政治指導者の嘘について<sup>12)</sup>の著作がある。国際政治の構造が国家の行動を制約すると考えている点でネオリアリストであり、また二極の国際システムが最も安定的であるとする点はケネス・ウォルツと同じであるが、国家の行動原理が自己保存のみならずパワーの拡大であるという彼独自の議論を展開し、1990年代の攻撃的リアリズム vs. 防御的リアリズムの議論の中では、攻撃的リアリストに分類されている<sup>13)</sup>。

『大いなる妄想 *The Great Delusion*』が、1912年に出版されて話題を呼んだノーマン・エンジェルの『大いなる幻想 *The Great Illusion*』を意識して付けられたタイトルであることは言うまでもない。『大いなる妄想』は、ウォルトの著作と同様、アメリカ外交を理解する目的で執筆され、ポスト冷戦期におけるアメリカの対外政策を強く批判している。本の大半、とりわけ最初の部分は政治理論についての議論で埋め尽くされており、国際政治学と関係する議論

11) John J. Mearsheimer, *The Tragedy of Great Power Politics*, (W.W. Norton, 2001); 奥山真司訳『大国の悲劇：米中は必ず衝突する！』（五月書房、2007年）。

12) John J. Mearsheimer, *Liddell Hart and the Weight of History*, (Cornell University Press, 1988); *Conventional Deterrence*, (Cornell University Press, 1983); *Why Leaders Lie: The Truth about Lying in International Politics*, (Oxford University Press, 2011); 奥山真司訳『なぜリーダーはウソをつくのか：国際政治で使われる5つの「戦略的なウソ」』（五月書房、2012年）。

13) 「バンビであるよりゴジラであれ」がミアシャイマーの標語である。しかし、攻撃的 (offensive) vs. 防御的 (defensive) は、「分析のレベル」の第2イメージに属す議論であるため、第3イメージの学者であるミアシャイマーは、この議論の中で攻撃的リアリストに分類されるのを好ましいとは思っていない。

が登場するのは第5章からである。ミアシャイマーは、リベラリズム、ナショナリズム、リベラルな覇権を定義し、なぜアメリカが「リベラル覇権主義」に基く政策をとってきたのか、またそれが何をもたらしたか、そして最後になぜリベラルな覇権が失敗するのか、未来に何が期待できるのかを明らかにしている。著作が主張するのは、冷戦終焉後のリベラリズムの失敗は、ナショナリズムとリアリズムがリベラリズムを常に圧倒するからであること、大国をどう制約するかについての健全な理解に基づいた抑制的な外交政策を採用すべきであること、である。

ミアシャイマーは、まず第1章から第3章にかけて、人間の本性にさかのぼって、リベラリズムとナショナリズムについて考察する。リベラリズムは民主主義と相互依存と制度に基づくイデオロギーであり、その土台には個人の自由についての前提に基づく二つのタイプがある。一つは暫定的リベラリズム (*modus vivendi liberalism*)、もう一つは、進歩的リベラリズム (*progressive liberalism*) である。前者においては、奪うことのできない個人の自由を尊重し、優先する立場から、人間は、集団として善悪の判断をつけたり、普遍的なルールや原則に同意することはできないとする。これは古典的リベラリズムや、国家の役割を必要最小限に限るリバタリアンの考え方である。一方、後者はより野心的で使命感を帯びたりベラリズムであり、例えば、ジェンダーや人権等の問題について、人々は普遍的な原則に合意することが可能であるとするタイプである。アメリカが「救世主国家」として自国の理念を世界に拡大しようとする傾向は、後者のタイプのリベラリズムである。

しかし、リベラルな理想主義は人気取りや偽善のこともある。第4章でミアシャイマーは、リベラリズムとナショナリズムの関係について論じながら、リベラリズムの陥穽と限界を示す議論に移る。リベラリズムは、健全な意見交換や「抑制と均衡 (checks and balances)」が働く点で、国内統治の方法としては素晴らしいが、それは国内政治に政府が存在し、正統な暴力を独占する軍隊と警察が存在するからこそ成り立つものである。一方、ナショナリズムは、自国への強いアイデンティティーの感覚である。ベネディクト・アンダーソンやエルンスト・ゲルナーが考察したように、共通の感覚を持つことは人々にとっ



ては意味あることであり、国家を守る意識、国家によって守られる意識がいったん出来上がると、国家が生き残ろうとするメカニズムを壊すのは難しい。

ミアシャイマーは、ナショナリズムについて3つの前提を提示する。まず第一に、人間は社会的動物である。第二に、集団への忠誠心は個人よりも重要である。第三に、家族以外で最も重要な集団は国家であり、民族集団は独自の国家を要求する。ナショナリズムがリベラリズムよりも強力な理由は、人間は社会的動物であるため、人々は個人の権利よりも集団の権利に重きを置くからである。個人の権利に対するコミットが浅くても、国家保全へのコミットは永遠であることから、強力なナショナリズムは他のイデオロギーを打ち負かしてしまう力を持っているとミアシャイマーは指摘する。

第4章以降、第7章までは、リベラルな覇権が招く外交政策の失敗とその理由についてである。リベラルな覇権は、戦争を永続化し、国家を疲弊させると同時に、国内秩序も乱して、結果的に多大なコストを支払うことになると、ミアシャイマーは論じる。ベトナム、イラク、アフガニスタンは、アメリカがリベラルな覇権を輸出しようとして失敗した例である。ナショナリズムの根底にあるのは主権の考え方であるため、各国は介入を嫌い、覇権を押し付けられると、人々は集団として抵抗する。人々が求めるのは民主主義よりも安全保障であり、そのためには「ソフトな権威主義」すら甘んじて受け入れるのである。

第7章では、リベラリズムの3つの流れである経済的相互依存論、民主的平和論、国際制度論それぞれをミアシャイマーは論駁する。相互依存論については、高い相互依存度にもかかわらず、第一次世界大戦が起こったこと、民主的平和論については、アメリカがラテンアメリカ諸国に介入した例からわかるように、リベラルな国家も非リベラルな国家と同じように他国を攻撃することを示す。また、アメリカのサウジアラビアに対する態度にみられるように、アメリカはリベラル・デモクラシーの価値観から程遠い権威主義体制の国々とも良好な関係を築いてきたことも指摘している。国際制度論については、ロシア、中国、アメリカ等の大国が、国際社会のルールを破って他国や他地域への介入を繰り返していることを、国際制度の限界を示す例としてあげ、国際社会のルールや規範が中小国には通用しても、大国には通用しないことを論じる。さらに、

近年のアメリカ外交の失敗例として、中東に民主主義を浸透させようとしたブッシュ・ドクトリンや、ウクライナ危機、NATOの拡大を批判している。とりわけNATOの拡大は「冷戦後のアメリカ外交の諸悪の根源」であり、アメリカがヨーロッパの地政学を無視した結果、米露関係の悪化を招いた。また、中国がいずれリベラル・デモクラシーになるとナイーブに信じて、中国の台頭を促したことも失策であったと論じている。

アメリカはなぜリベラルな覇権を追求したのだろうか？国際政治構造が一極になった結果、勢力均衡が働かなくなったからである。ミアシャイマーは考えている。冷戦終焉後、アメリカの軍事費は大幅に増加し、平和に貢献するどころか戦争に終始し、国内社会におけるリベラルな価値観をも脅かすようになってしまった。世界を自分のイメージでつくりかえようとするのが大きな間違いであることをミアシャイマーは繰り返し論じ、アメリカ一極の時代は終わったのだから、リベラルな覇権も終焉したのだと述べる。そして最終章において、アメリカ外交政策の自制を呼び掛け<sup>14)</sup>、北米とヨーロッパを戦略的利益の中核として、アメリカの相対的パワーを高めるべきであるとする。とりわけコストの高い戦争を避け、中国が地域的覇権国にならないようにすることの重要性をミアシャイマーは唱えている<sup>15)</sup>。

### 3. 対外政策におけるリアリズムとリベラリズム：アメリカ外交の本質とは？

アメリカ対外政策専門の研究者や外交政策に携わる実務家から実に多くの論考が発表されている中でも<sup>16)</sup>、アメリカ外交の理解と評価を目的として、明快かつ平易な文体と論理展開で執筆された両著は、議論をサポートする事例も豊富に提示され、説得力がある。アカデミズムの世界にいる学者がここまで痛烈

14) 第8章。“The Case for Restraint.”

15) 対中関係に関して、ミアシャイマーの見解は、『大国政治の悲劇』を著作した時から一貫している。

16) 例えば、Jake Sullivan, “Where U.S. Foreign Policy Should –and Shouldn’t–Go from Here,” *Foreign Affairs*, (December 11, 2018)。

な政策的批判を行うのは、かなり珍しいといえよう。ウォルトが実体的な外交コミュニティの詳細な調査を通してアメリカ外交批判を展開したのに対し、ミアシャイマーは政治思想についての理論的探究を通してアメリカの外交姿勢を批判しており、両著を補完的に読むことで、さらにアメリカ外交理解に向けての視野が拓けてくる。以下、それぞれの著作に対する問題点を指摘した後、両著作に共通する論点として、1) アメリカ外交をリベラルな覇権の観点から解釈することの妥当性、また、2) 具体的な処方箋としてのオフショア・バランスिंगの是非を取り上げたい。

ウォルトの著作についておそらくもっとも大きな議論を引き起こすと予測されるのは、外交コミュニティに対する痛烈な批判であろう。外交の日々の実務に携わる外交エリートは、部外者には到底推測できないような困難な政策策定やその実行上の問題に直面している。ウォルトが「blob」と呼ぶ外交エリートたちが、どれだけ真摯に日々の仕事に向き合い、国家のために身を粉にして働いているかは、想像を絶するものがある。とりわけ政権運営に携わった経験がある学者や実務家にとっては、アメリカがこれまで国際社会の制度構築と維持に重要な役割を果たしてきたことを無視し、あざ笑っているかのようにも映るウォルトの見解は、受け入れがたいであろう。実際の対外政策決定の場は、ウォルトが描写する自家中毒的な外交コミュニティよりも、格段に外の世界に開かれ、柔軟に過去から学び、適応しようとするダイナミズムが存在するはずである。<sup>17)</sup>

ミアシャイマーによるリベラリズムの明確な定義と分類に基づく分析は、リベラリズムが内包する矛盾を鮮やかに描き出した点において見事である。しかし、リベラリズム、ナショナリズム、リアリズムを同列に並べるのは妥当であろうか? ナショナリズムは感情であり、リアリズムとリベラリズムが理論であ

---

17) Hal Brands, Peter Feaver, and William Inboden, "In Defense of the Blob: America's Foreign Policy Establishment Is the Solution, Not the Problem," *Foreign Affairs*, (April 29, 2020).

るところに、いささかの違和感を禁じ得ない。また、本の半分を割いて政治思想について論じることによって、アカデミックな著作としての重みが増し、アメリカ外交の根幹部分についての深い考察につながっている一方で、人間の本性についての政治理論と現代の外交政策についての議論との間にはギャップを感じざるを得ない。とりわけ最初の3章は、外交政策理解と批判を目的とする本全体の趣旨とかみ合っていない感が残る。

### 1) アメリカ外交の特徴としてのリベラルな覇権？

アメリカの対外政策の基調をなすのはウォルトとミアシャイマーが主張するように、リベラルな覇権なのだろうか？確かにアメリカは移民によって人工的に建設された国家であり、建国期から領土拡張していく過程で培われた理念が外交政策に色濃く反映されている点は、しばしば指摘されてきた。しかし、リベラルな覇権がアメリカ外交のエッセンスであるという見方が正しいならば、それがアメリカ史上、最も顕在化したのは、第二次世界大戦直後なのではなかろうか？第二次世界大戦直後のアメリカは、世界の国民総生産の50%を占める圧倒的国力を誇り、国際社会のリーダーとして国際金融・貿易システム、安全保障システムを構築し、世界の平和と安定に大きく貢献していた。また、周辺地域の安全保障に介入する傾向は、冷戦終焉後のみの特徴ではなく、冷戦期にもしばしば見られたのではなかろうか？従って、リベラルな覇権を冷戦終焉後のみのアメリカ外交の特徴とするのは必ずしも正確ではないと思われる。

また、冷戦終焉後のアメリカ外交をリベラルな覇権で特徴づけることについても議論の余地があるだろう。例えばウォルトは、オバマ外交について、ブッシュよりも外交レトリックがトーンダウンしただけで、アメリカの対外姿勢を根本的に変えたとはいえないと述べ、それまでの政権と同様、「リベラル覇権主義」によって失敗したと考えているが、オバマが「Don't do stupid things (ばかなことはしない)」をモットーとし、戦争を起こしたり他国に介入することについて非常に慎重であったことはよく知られている。核廃絶を訴えたり、移民政策を緩和したり、オバマ・ケアを導入するなど、リベラルな価値観を前面に出した政策も採ったが、イラクをアメリカから撤退させたのも、シリアへ

の介入を控えたのもオバマである。

そしてアメリカ外交が失敗してきたとすれば、それはリベラルな覇権というイデオロギーによるものと言い切れるだろうか? それはむしろ、単に政策実施の問題といえるのではないか?あるいはアメリカがリベラルな外交政策を行わなかったための失敗もあるではないのか?例えば、イラクでアメリカが本当にリベラルな覇権にコミットしていたと言い難い。実際、リベラルという価値観と国益の区別を明確につけるのはしばしば難しい。リベラルな価値観に基づく人権擁護政策は、人道的介入の言い訳になることもあれば、アメリカの国益擁護と重なることもある。この点、ウォルトはミアシャイマーよりも、戦争防止やジェノサイド防止、人権擁護の理由でアメリカがパワーを行使するのにやぶさかではなく、(1)危険が差し迫っていること、(2)コストがかかりすぎないこと、(3)外国人の生命や自国民の命が助かる確率が高い、等の条件が整った場合の介入は支持する立場である。実際、気候変動、感染症対応、大量破壊兵器拡散防止、経済危機の回避等にアメリカが関わることは、国際的な評判にも関わり、アメリカの国益にも資することが多いからである。

## 2) オフショア・balancingをめぐる問題

対外政策におけるリアリストの基本姿勢は、国益を狭く定義し、自国の国益に関わらないところには出て行かないというものである。ウォルトとミアシャイマーが民主主義拡大に反対し、アメリカが多額の資金をテロとの戦いにつぎ込んだことを批判するのは、自国の国益よりも他国を優先する行為に反対だからである。彼らにとって、他国の国家建設や対ゲリラ戦に関わるのは「地雷を踏むような」ものである。そのため、20世紀前半のオフショア・balancingの成功を例に挙げて、具体的にはヨーロッパと中東から手を引くことを提唱するのである。

しかし、地域安全保障からアメリカが手を引いた後、世界的に影響が及ぶような形で周辺地域の安全が脅かされる事態が生じたら、どうするのか? 地域からの撤退は、一時的なコスト削減にはなるかもしれないが、地域的問題が生じた場合、アメリカは大国として介入せざるを得なくなり、結果的にはよりコス

トがかかることにならないだろうか。実際、今日の世界における地域安全保障にアメリカのプレゼンスが持っている意味は大きい。また、現実の政策に携われれば、介入か撤退かの一元論で片付けられる問題はほとんどない。外交実務に携わる者たちは、国内社会と国際社会の両方にアカウンタビリティがあり、国内・国外の二つのゲームが同時進行している中、しばしば苦渋の選択を迫られながら仕事をしていることも念頭におくべきであろう。

以上のような疑問がいくつか生じるものの、ウォルトとミアシャイマーの著作からは、世論や政策コミュニティに媚びることなく、歯に衣着せぬ言葉で、外交政策の主流の見解とは異なる思想を、選び抜かれた方法によって語る知的誠実さが伝わってくる。両著は、外交の美辞麗句に彩られるレトリックで見えなくなっている部分に我々の目を向けさせ、きれいごとで済まない国際政治の現実を浮かび上がらせながら、アメリカ外交に対する切実な訴えを伝える内容となっている。

悲観的な世界観や戦争愛好主義のイメージ、将来に向けての変化や展望が欠如しがちなために、国際政治学のリアリストたちは、往々にして毛嫌いされる傾向がある。とりわけ特定の国や地域に特別な愛着や関心を寄せる比較政治学者や国内政治の専門家にとって、すべての国を客観的・平等に扱うリアリストの視点は、ドライで味気なく、時に疎ましくすら思われがちである。リアリストの論客に不思議と単著が多いのも、いわゆるアイビー・リーグの大学と縁が少ないのも、それと関連しているのかもしれない。しかし、ミアシャイマーがリアリストの責務として主張するように、現実の世界をありのままに描き、「妄想に走る」リベラルの論客が無視したり、解決できるふりをする問題に取り組むことこそ、国際社会の安全保障上最も危険な「不均衡な多極」システムにおいてアメリカが救世主的衝動に駆られがちな今日、意義あることなのである。ウォルトとミアシャイマーの著作からは外交政策の哲学でもあるリアリズムのエッセンスが浮かび上がると同時に、今日起こっている様々な国際問題を理解するうえで参考となるナショナリズムと普遍主義の対話をめぐる緊張感も伝わってくる。

冷戦終焉後、アメリカ一極システムが到来した時に、アメリカは新しい役割を認識し、それを受け入れた。強大なパワーを持つ国が国際社会で大きな責任を担うのは何ら不思議ではない。そして強大な国は傲慢になりがちであり、傲慢な国は外交政策で失敗する。このことを踏まえて、ウォルトはリアリズムのエッセンスを「謙虚さ (humility)」と理解する。ヘロドトスやツギジデスの時代から今日まで、リアリストたちが重視してきたのは「慎重さ」という美德であり、人間の傲慢さ (hubris) に対する警告であった。両著者の政策的主張の根底に流れるそういった深い理論的思索を理解してこそ、この二冊の本の意義はより一層深くなるといえよう。